

アートは、毎日、楽しい

角和昌浩

引退生活の良いところは、好きなことを毎日、週7日、サボりながらやれることでしょう。

わたしは日常、陶芸と水墨画を遊んでいます。やきもの歴は35年、窯とアトリエがあります。水墨画は8年くらいで、もともと器の絵付けが上手になりたいので筆を持ったのですが、実は2つのアートは全く別の修練が必要でした。

この文章では、陶芸と水墨画の白色表現の違いについて書いてみます。

墨絵は、黒と白の2色しぼりのアートで、余白表現が見どころです。

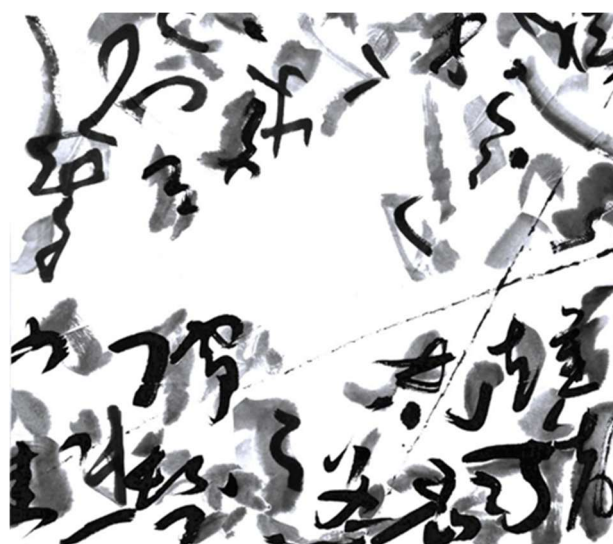
左の作品は展覧会用で、なかなか時間をかけて描き込んでいます。作者は画面上で、余白領域の必然性を探りつづけます。

右の作品は、まず書作品を作りました。肥瘦の筆勢を見どころとする草書が書けたら、次に、墨書をハサミでバラバラに切り離す。それから真っ白な紙の上に、筆勢の残る切り紙を配置しながら、画面中央に白い空間を作り出そうとしました。

このように墨絵では、白色を「余韻」として、あるいは「気韻」や「無」として表現します。



Jack Straw's Castle, London



草書たちが、夢を見る

やきものの白色は、墨絵とは対照的です。

ここでは白色は五彩のひとつ。五彩とは、青、黄、赤、白、黒色の五色で中国や朝鮮の文化に由来します。なにしろ、やきものの技と美は大陸からもたらされたのですから。

粘土と釉薬と窯で五彩を得ます。とりわけ白は他の色と同じくらい、はなやかで力強い大事な色。やきものの表現の白色は、「余白」でも「無」でもなく、自己主張があり、時に饒舌です。

窯の焚き方の加減で多様なニュアンスの白が現れます。左の盃は還元焼きで、ガラス質で覆った胎土は、ほのかな青みを帯びています。

右の徳利も還元窯ですが、こちらは釉薬を打たず、裸の胎土が LPG 燃料の炎を、4 時間、浴び続けました。



盃、呉須絵、五斗蒔土



徳利、焼締白泥流し、信楽土